

令和5年度 一般選抜 I期 入学試験問題

国 語 (50分)

注意事項

1. 「始め」の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. この問題冊子は全部で9ページです。印刷不鮮明などの箇所があった場合は申し出てください。
3. 答えは解答用紙の所定の欄に記入してください。
4. 使用する問題冊子と解答用紙の指定欄に**受験番号** (数字) を必ず記入してください。
5. 解答作業には必ず**黒の鉛筆** (HB以上) または**シャープペンシル**を使用し、ボールペンや色鉛筆などを使ってはいけません。
6. 試験終了後に、解答用紙、次に**問題冊子**を回収します。問題冊子の余白や裏面は、**下書き**に使用してもかまいません。
解答用紙は破ったり、汚したりしないでください。
7. 「やめ」の合図で、すぐに筆記用具を置き、静かに待っていてください。

一

次の文章は上田正仁の『東大物理学者が教える「考える力」の鍛え方』からの抜粋です。但し設問の都合上、一部改変してあります。読んで以下の問に答えなさい。

大学は、学生がこれからの人生で①直面するであろう②試験を乗り越えるすべを身につけるための③道場であると言えます。

1

大学に入学した学生を見ると、彼らが不安にかられたり壁に突き当たるのには、一定の時期とパターンがあることに気づきます。最初は入学直後であり、その次が卒業して社会人になる、あるいは大学院に入学した時期です。

2

3

4

5

これらはいずれも、要求される思考の質の変化が原因なので、それを④克服するためには状況の変化を正しく理解したうえで、⑤意識的に対応することが必要です。にもかかわらず、そのような⑥体系的な教育はこれまでなされてこなかったというのが現実でしょう。

A 学生が入学直後に直面する戸惑いは、高校までのマニュアル的学習法、すなわち、一通りに答が決まっている問題の解法を短期間に⑦要領よく学ぶ勉強法から⑧脱却して、急に同じテーマについて長く深く考えることが要求されるようになることです。

B この段階で、優秀さの⑨尺度は「考える力」から「創造力」へと激変するのです。これもそれ以前の思考パターンからの大転換を迫られるものであり、その変化に多くの人がついていけず戸惑いを感じ、時にはパニックに陥ってしまいます。

C さらに、社会や大学院への入学後に直面する問題は、与えられた課題を解くことから自ら課題を見つけ、それを自らの方法で^⑩創造的に解決することを迫られることによって生じるものです。

D すなわち、優秀さの尺度が「マニュアル力」から「考える力」へと突然変化するのです。そのため、大学での勉強が急にむずかしく感じられるのです。

E 入学時には不安や劣等感にさいなまれていた学生がふとしたきっかけでなぜ大きく成長できるのか、高校時代には抜群の成績を残してきた学生の多くがなぜ挫折感を味わうのか、また、そうならないためにはどうすればよいのか。私は^⑪仕事柄、このようなことを長年考え続けてきました。

問一 文章中の空欄1～5には文章A～Eが入ります。最も適する順番に並び替えて、記号で答えなさい。

問二 文章中の傍線部①～⑪の漢字の読みを平仮名で書きなさい。

- | | | | |
|-------|-------|-------|------|
| ① 直面 | ② 試練 | ③ 道場 | ④ 克服 |
| ⑤ 意識的 | ⑥ 体系的 | ⑦ 要領 | ⑧ 脱却 |
| ⑨ 尺度 | ⑩ 創造的 | ⑪ 仕事柄 | |

次の文章は有島武郎の『生まれ出づる悩み』からの抜粋です。これを読んで以下の問に答えなさい。

私は自分の仕事を神聖なものにしようとしていた。ねじ曲がろうとする自分の心をひっぱたいて、できるだけ伸び伸びしたまっすぐな明るい世界に出て、そこに自分の芸術の宮殿を築き上げようともがいていた。それは私にとってどれほど喜ばしい事だったろう。と同時にどれほど苦しい事だったろう。私の心の奥底には確かに——すべての人の心の奥底にあるのと同様な——火が燃えてはいたけれども、その火を燻らそうとする塵芥の^{ちりあかた}① **タイセキ**はまたひどいものだった。かきのけてもかきのけても容易に火の燃え立つて来ないような瞬間には私はみじめだった。私は、机の向こうに開かれた窓から、冬が来て雪にうずもれて行く一面の畑を見渡しなが^ら、**トドコオ**りがちな筆をしっかりとけしかりつけ運ばそうとしていた。

寒い。原稿紙の手ざわりは氷のようだった。

陽は少しずつ暮れて行くのだった。灰色からねずみ色に、ねずみ色から墨色にぼかされた大きな紙を目の前にかけて、上から下へと一気に視線を落として行く時に感ずるような速さで、昼の光は夜の闇に変わって行こうとしていた。午後になったと思うまもなく、どんどん暮れかかる北海道の冬を知らないものには、日がいち早く蝕^{むしば}まれるこの気味悪いさびしさは想像がつくまい。ニセコアの^③ **キュウリヨウ**の裂け目舞い飛ばした。雪片は暮れ残った光の迷子のように、ちかちかした印象を見る人の目に与えながら、いたずら者らしくさんざん飛び回った元気にも似ず、降りたまつた積雪の上に落ちるや否や、寒い^④ **ウスムラサキ**の死を死んでしまう。ただ窓に来てあたる雪片だけがさらさらさらとささやかに音を立てるばかりで、他のすべてのやつらは残らず唾だ。快活らしい白い唾の群れの舞踏——それは見る人を涙ぐませる。私はさびしさのあまり筆をとめて窓の外をながめてみた。そして君の事を思った。

私が君に始めて会ったのは、私がまだ札幌に住んでいるころだった。私の借りた家は札幌の町はずれを流れる豊平川という川の^⑤ **ウガン**にあった。その家は堤の下の一町歩ほどもある大きなりんご園の中に建ててあった。

そこにある日の午後君は尋ねて来たのだった。君は少しふきげんそうな、口の重い、癩かんで背だけが伸び切らないといったような少年だった。きたない中学校の制服の立て襟えりのホックをうるさそうにはずしたままにしていた、それが妙な事にはことにはつきりと私の記憶に残っている。

君は座につくとぶつきらぼうに自分のかいた絵を見てもらいたいと言ひ出した。君は片手ではかえ切れないほど油絵や水彩画を持ちこんで来ていた。君は自分自身を平気で虐げる人のように、ふろしき包みの中から乱暴に幾枚かの絵を引き抜いて私の前に置いた。そしてじつと探るように私の顔を見つめた。明らさまに言うのと、その時私は君をいやに高慢ちきな若者だと思った。そして君のほうには顔も向けないで、^aよんどころなくさし出された絵を取り上げて見た。

私は一目見て驚かすにはいられなかった。少しの修練も経てはいないし幼稚な技巧ではあつたけれども、その中には不思議に力がこもつていてそれがすぐ私を襲つたからだ。私は画面から目を放してもう一度君を見直さないうちはいられなくなった。で、そうした。その時、君は不安らしいそのくせ意地つばりな目つきをして、やはり私を見続けていた。

「どうでしょう。それなんかはくだらない出来だけれども」

そう君はいかにも自分の仕事を軽蔑するように言った。もう一度明らさまに言うが、私は一方で君の絵に喜ばしい驚きを感じながらも、いかにも思いあがつたような君の物腰には一種の反感を覚えて、ちよつと皮肉でも言つてみたくなつた。「くだらない出来がこれほどなら、会心の作というのはいしたものでしょうね」とかなんとか。

しかし私は幸いにもとつきに、^Aそんな言葉で自分を穢すことをのがれたのだつた。それは私の心が美しかったからではない。君の絵がなんといつても君自身に対する私の反感に打ち勝つて私に迫つていたからだ。

君がその時持つて来た絵の中で今でも私の心の底にまざまざと残っている一枚がある。それは八号の風景にかかれたもので、軽川あたりの^⑥デイトンチを写したと覚しい晩秋の風景画だつた。荒涼と見渡す限りに連なつた地平線の低い葦原あしはらを一面におおうた雲雲みぞれのすきまから午後の日がかすかに漏れて、それが、草の中からたつた二本ひよろひよろと生い伸びた^⑦シラカバの白い樹皮を力弱く照らしていた。単色を含んで来た筆の穂が不器用に画布にたたきつけられて、そのままけし飛んだような手荒な筆触で、自然の中には決して存在しないと言われる純白の色さえ他の色と練り合わされずに、そのままべとりとなすり付けてあつたりしたが、それでもじつと見ていると、そこには作者の

⑧ **エイビン**な色感が存分にうかがわれた。そればかりか、その絵が与える全体の効果にもしつかりとまとまった気分が行き渡っていた。悒鬱^{ゆううつ}——十六七の少年には咄め^{はくめ}そうもない重い悒鬱^{ゆううつ}を、見る者はすぐ感ずる事ができた。

「たいへんいいじゃありませんか」

絵に対して素直になった私の心は、私にこう言わきないではおかなかつた。

それを聞くと君は心持ち顔を赤くした——と私は思った。すぐ次の瞬間に來ると、君はしかし私を疑うような、自分を冷笑^{あざわら}うような冷やかな表情をして、しばらくの間私と絵とを等分に見くらべていたが、ふいと庭のほうへ **B** 顔をそむけてしまった。それは人をばかにした仕打ちとも思えば思われない事はなかつた。二人は気まづく黙りこくってしまった。私は所在なさに黙ったまま絵をながめつつづけていた。

「そいつはどこん所が悪いんです」

突然また君の無愛想な声が出た。私は今までの妙にちぐはぐになった気分から、ちよつと自分の意見をずばずばと言い出す気にはなれないでいた。しかし改めて君の顔を見ると、言わさないじゃおかまいぞといったような真剣さが現われていた。少しでも **b** まに合わせを言おうものなら軽蔑してやるぞといったような鋭さが見えた。よし、それじゃ存分に言つてやろうと私もとうとうほんとうに腰をすえてかかるようにされていた。

その時私が口に任せてどんな生意氣を言つたかは幸いな事に今はおおかた忘れてしまっている。しかしとにかく悪口としては **⑨** **ギコウ**が非常にあぶなつかしい事、自然の見方が不親切な事、モテイヴ^{たんじょう}が耽情的^{たんじょう}過ぎる事などをならべたに違いない。君は黙つたまままじまじと目を光らせながら、私の言う事を聞いていた。私が言いたい事だけを **c** あけすけに言つてしまうと、君はしばらく黙りつづけていたが、やがて口のすみだけに始めて笑いらしいものを漏らした。それがまた普通の微笑とも皮肉な痙攣^{けいれん}とも思いなされた。

それから二人はまた二十分ほど黙つたまま向かい合つてすわりつづけた。

「じゃまた持つて来ますから見てください。今度はもつといいものをかいて来ます」

その沈黙のあとで、君が腰を浮かせながら言つたこれだけの言葉はまた僕を驚かせた。まるで別な、**⑩** **ウブ**な、素直な子供でもいったような無邪気な明るい声だつたから。

不思議なものは人の心の働きた。この声一つだった。この声一つが君と私とを堅く結びつけてしまったのだった。私は結局君をいろいろに邪推した事を悔いながらやさしく尋ねた。

「君は学校はどこです」

「東京です」

「東京？ それじゃもう始まっているんじゃないか」

「ええ」

「なぜ帰らないんです」

「どうしても落第点しか取れない学科があるんでいやになったんです。……それから少し都合もあって」

「君は絵をやる気なんですか」

「やれるでしょうか」

そう言った時、君はまた前と同様な強情らしい、人に迫るような顔つきになった。

私もそれに対してなんと答えようもなかった。専門家でもない私が、五六枚の絵を見ただけで、その少年の未来の運命全体をどうして大胆にも決定的に言い切る事ができよう。少年の思い入ったような態度を見るにつけ、私にはすべてが恐ろしかった。私は黙っていた。

「僕はそのうち郷里に——郷里は岩内です——帰ります。岩内のそばに^①イオウを掘り出している所があるんです。その景色を僕は夢にまで見ます。その絵を作り上げて送りますから見てください。……絵が好きなんだけれども、下手だからだめです」

私の答えのないのを見て、君は自分をたしなめるように堅いさびしい調子でこう言った。そして私の目の前に取り出した何枚かの作品をめちやくちやにふるしきに包みこんで帰って行ってしまった。

君を木戸の所まで送り出してから、私はひとりて手広いりんご畑の中を歩きまわった。りんごの枝は熟した果実でたわわになっていた。ある木などは葉がすっかり散り尽くして、赤々とした果実だけが真裸で^{るる}累々と日にさらされていた。それは快く空の晴れ渡った小春びよりの一日だった。私の庭下駄に踏まれた落ち葉はかわいた音をたてて^{みじん}微塵に押しひしがられた。豊満のさびしさというよ

うなものが空気の中にしんみりと漂っていた。ちょうどそのころは、私も生活のある一つの **キロ** に立って疑い迷っていた時だった。
私は冬を目の前に控えた自然の前に幾度も知らず知らず棒立ちになつて、君の事と自分の事をまぜこぜに考えた。

問一 文章中の傍線部①～⑫のカタカナを漢字に直して楷書で書きなさい。

- | | | | | | | | |
|---|------|---|-------|---|--------|---|--------|
| ① | タイセキ | ② | トドコオ | ③ | キュウリヨウ | ④ | ウスムラサキ |
| ⑤ | ウガン | ⑥ | デイトンチ | ⑦ | シラカバ | ⑧ | エイビン |
| ⑨ | ギコウ | ⑩ | ウブ | ⑪ | イオウ | ⑫ | キロ |

問二 文章中の傍線部 a～c の文章中の意味として最も適するものを次のア～オの中から選び記号で答えなさい。

a よんどころなく

ア しかたなく

イ 無作法に

ウ よどみなく

エ 平常心で

オ ただちに

b まに合わせ

ア じっくり考えたこと

- イ 意志に反したこと
- ウ すぐに思いついたこと
- エ 批判めいたこと
- オ その場しのぎのこと

C あけすけに

- ア 少しずつ
- イ 包み隠さずに
- ウ 調子に乗って
- エ 一方的に
- オ かいつまんで

問三 文章中の傍線部A「そんな言葉で自分を穢すことをのがれたのだった。」とあるが、そんな言葉が自分を穢すのは何故ですか。その

理由として最も適するものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 君の傲慢な態度に対して怒りを込めて君の絵を否定することは、直接指摘しない卑怯な行動であると思われるから。
- イ 君の強情な態度を正そうと君の絵を批判することは、自分に正直になれない心の弱さを露呈することになると思われるから。
- ウ 君の素直でない態度に対して君に皮肉を言うことは、美しい心であろうとする自分の生き方を君に押しつける傲慢な行動に思われるから。
- エ 君の尊大な振る舞いに不快を感じ君の絵を認めないことは、自分の芸術に対する気持ちを偽ることに思われるから。
- オ 君の他人を小馬鹿にする態度に流されて君の絵をほめることは、君に負けを認めたよう屈辱的に思われるから。

問四 文章中の傍線部B「顔をそむけてしまった。」とあるが、この表現から読み取れる「君」の様子として最も適するものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の絵を認めていなかった私からのほめ言葉を聞いて、今更態度を変えた私を馬鹿にしている様子。

イ 予想に反して私に自分の絵をほめられたので、どう反応すべきかわからず混乱しているのを隠している様子。

ウ 自信の無い自分の絵を表面的にほめる私の言葉に反発して、心にも無い事を平然と言う私を見下している様子。

エ 自分の絵に対する私の素直なほめ言葉を聞いて満足したが、それを私に悟られないように隠そうとする様子。

オ 自分の絵をほめられて良い気分になったが、私の言葉の真実味に疑念を抱き、納得していない様子。

問五 文章中の傍線部C「私は冬を目の前に控えた自然の前に幾度も知らず知らず棒立ちになって、君の事と自分の事とをまぜこぜに考えた。」とあるが、このときの「私」の様子として最も適するものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 将来を見通せない私と比べて、晴れ渡った空のように自分の将来を見切っている君に敬意を抱き背筋が伸びる様子。

イ 冬に向かう大自然に実るりんごの果実の姿に、君との強烈で充実した出会いを思い起こし余韻に浸っている様子。

ウ りんごの木に取り残された果実を眺めながら、先行き不透明な君と私の二人の将来に不安を感じ立ちすくんでいる様子。

エ 君と私の将来がたわわに実ったりりんごの果実のように明るくなるように、祈るような気持ちでりんごを見つめている様子。

オ 将来について悩む君と私と比較すると、冬への準備を着々と進めるりんごの木の偉大さに圧倒され呆然としている様子。

